

演題名：統合失調症により社会性が欠如し、長年医療介入を拒否している患者のリハビリは可能か？  
：多職種連携によるアウトリーチ支援の意義

所属：医療法人社団さくらライフ さくらライフ錦糸クリニック

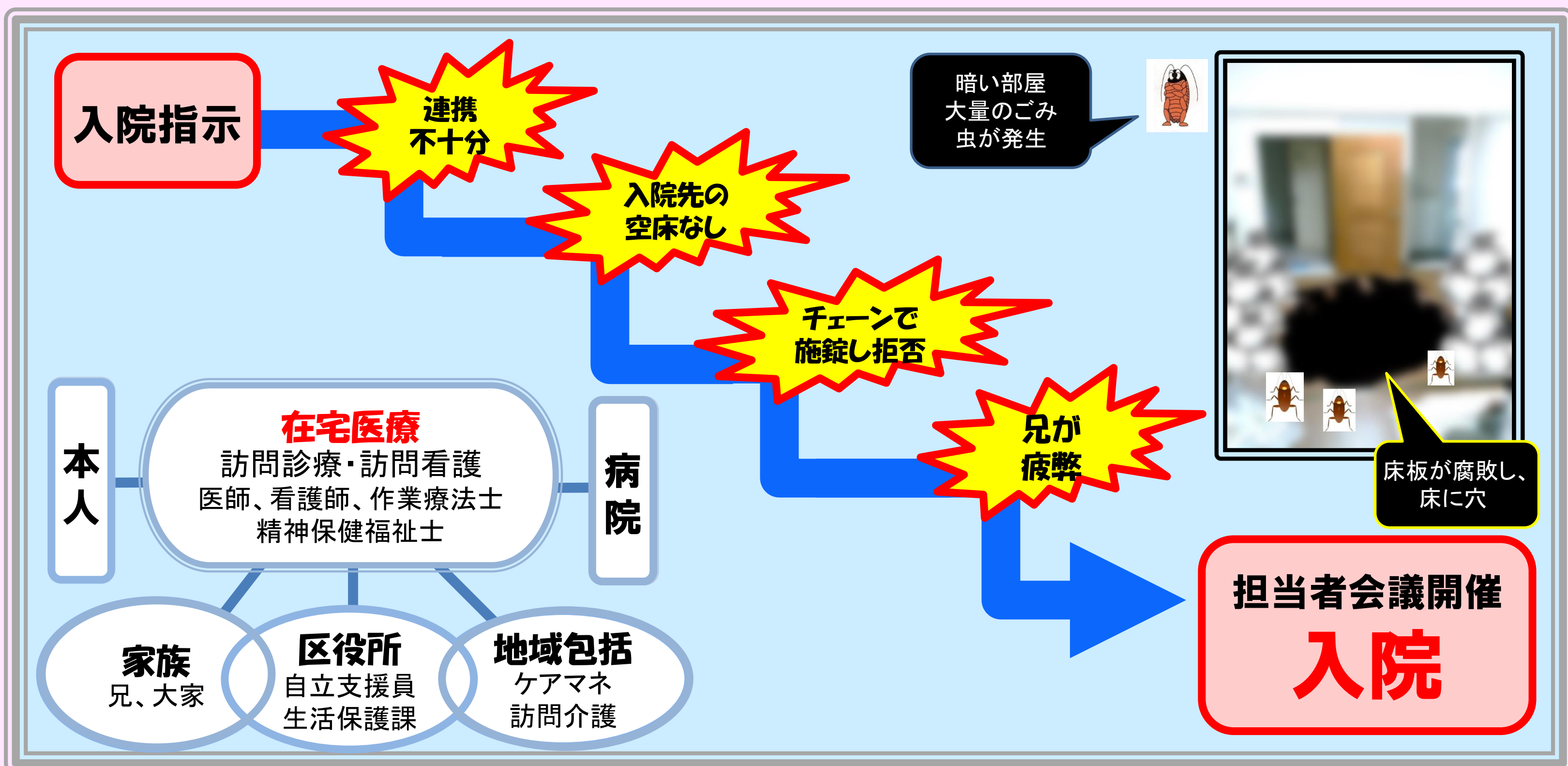
加藤 正徳、小比類巻 智子、下野 愛佳、木村 能久、松枝 啓

【目的】

長年治療が中断し、社会性が欠如した統合失調症患者がリハビリするために、多職種連携によるアウトリーチ支援が有効か否かを検証する。

【方法】

60代女性、約20年間治療が中断した統合失調症患者。患者は内向的な性格で陰性症状が強く、疎通不良の為、社会から孤立していた。室内には大量のゴミが放置され、虫がわき、床は腐敗し部屋の6割が陥没した状態だった。この患者の導入開始から現在までの関わりを研究チーム内で振り返り、情報の詳細化を図るために、電子カルテの情報も併せて患者のリハビリとの因果関係について考察した。



【結果】

訪問や服薬の拒否により、入院指示となるが、本人の拒否や周囲の調整が合わず、5度目の調整にてようやく医療保護入院となった。入院中に住宅改修を行い、自宅環境が改善され、継続的な治療が開始された事により、退院後も訪問時に促し、確認する事で服薬習慣をつけることができた。その事により、定期的な訪問が可能となり、週2回の訪問看護で入浴、掃除、洗濯等の生活技能の獲得に成功した。また、本人の訴えを自立支援員に伝え、通院同行してもらう事で義歯と眼鏡を作る事ができた。さらに、訪問介護に患者の生活パターンを伝え、入室時間を調整する事で定期的な介護支援を受ける事ができている。現在では、テレビドラマが面白いという発言が聞かれ、笑顔も見られるようになった。

【考察】

在宅医療が介入したことにより、諦めていた家族をも動かし、入院に繋がった事が、長年中断していた治療を受け入れる転機となった。治療を拒否する患者への支援を諦めず、在宅医療を中心とした他職種の連携により、支援者が様々な立場・視点から必要と思われる支援を根気強く関わった事で、患者との信頼関係の構築に繋がった。さらに支援者が患者のQOL向上について真摯に取り組み、アプローチし続けた事が患者のリハビリに有効だったと考える。